

REPORT 2009

Annual Report of Shiretoko Nature Foundation



財団法人 知床財団
SHIRETOKO NATURE FOUNDATION

2009 年度活動報告書

世界自然遺産知床を未来へ

皆様からのご支援が、知床の自然保護活動を支えています。

Contents

ごあいさつ	2
主な出来事・トピックス	3
2009年度の決算概要	5

事業報告 1 独自調査研究事業

 エゾシカ個体群の動態に関する調査研究	7
 知床半島におけるヒグマの生態等に関する調査	8
 知床の生態系の保全・復元に関する調査検討事業	8
 調査研究に関わる交流及び成果公表に関する事業	9
 水域における生物群集モニタリング調査	10

事業報告 2 財団活動事業

 知床自然センター、および羅臼ビジターセンターインフォメーション事業	11
 会員サービス	12
 地域向け財団活動紹介・情報提供事業	12
 寄付拡大推進事業	13
 財団ホームページによる広報活動事業	13

事業報告 3 自然教育活動開発研究事業

 しれとこ100平方メートル運動地保全・公開システム検討事業	14
 道東自然系施設ネットワーク推進事業	14
 地域向け環境教育事業	15
 職員の技術知識を高めるための研修事業	16

事業報告 4 ボランティア活動推進事業

 ボランティア活動推進事業	17
---	----

事業報告 5 普及事業

普及資料等販売および写真貸出し事業	18
ヒグマ対策普及事業	18

事業報告 6 研修実習事業

 知床の自然保護活動についての体験型教育プログラム事業	19
研修・実習受入れ事業	19

事業報告 7 受託事業

指定管理者業務	20
羅臼ビジターセンター関連管理運営業務	20
世界遺産センター関連施設運営環境教育業務	21
斜里町ヒグマ・自然環境管理対策業務	21
羅臼町ヒグマ・自然環境管理対策業務	23
国立公園野生生物管理業務	24
知床生物多様性保全業務	25
しれとこ100平方メートル運動地森林再生推進業務	26
遺産地域調査業務	27
科学委員会等運営業務	29
国立公園利用適正化業務	30
J B N 業務	31

事業報告 8 理事会・評議員会・協議会の開催・運営

理事会・評議員会・協議会の開催・運営	32
財団組織改革推進事業	32
2009年度の組織概要	33
寄付のお礼	34

 …目次、本文中にあるこのマークは、寄付金・賛助会費によって実施している事業であることを示しています。

2009年度年次報告に寄せて

財団法人 知床財団 理事長 関根郁雄

2009年11月、俳優・森重久彌氏が亡くなりました。氏が主演の映画「地の果てに生きるもの」のロケが羅臼町で行われた際に、名歌「知床旅情」が誕生したことをご存知の方も少なくないことと思います。氏は、お世話になった町の人々への感謝をこめて、歌を作ったと言われています。この歌が、知床の名を広く衆人に知らしめ、現在の知床観光発展の礎となりました。

また、2010年2月には、作家・立松和平氏が亡くなりました。氏は独特の語り口で知床の人と自然の有様を広く全国に伝えました。さらには地元の人々との幅広い交友を通じて、知床の自然に活かされている地域の人々が自ら守り育てることの大切さを説いて下さいました。

2009年度は、2010年7月の世界自然遺産登録5周年を前に、知床をこよなく愛してくださったお二人を相次いで見送った年となったのです。

2010年度も半ばとなった今、知床はまた大きく動きつつあります。

知床随一の観光名所であるとともに、ヒグマとの共存が長年大きな課題であった知床五湖では、全長800mの高架木道が完成し、安心して歩くことができるようになりました。一方、地上の歩道では、日本で初めてクマが常時住んでいることを前提にした利用の仕組みがスタートします。それは、安全のためのレクチャーを受けたり、ガイドが引率することを義務づける仕組みです。同時に、集中豪雨的な利用を改めて、自然への負荷

を緩和するとともに、本当に素晴らしい五湖の雰囲気回復しようとする仕組みでもあります。

科学的な知見を踏まえ、第三者の立場からもの申すご意見番「世界自然遺産地域科学委員会」は、我が国ではここ知床で初めて誕生し、先輩格の屋久島、白神山地でも取り入れられていきました。2009年、世界遺産登録の審査を受けるに至った小笠原でも、知床にならって発足しました。知床は我が国の世界自然遺産の保護管理のトップランナーになったのです。

2010年秋に名古屋で開催される生物多様性条約締約国会議においては、海洋保護区のあり方、特に漁業者の自主管理に基づく海洋資源の適正な利用を評価していこうという動きがあります。我が国で唯一海域を含む世界自然遺産の地である知床の海域管理計画も、一つのモデルとして議論の俎上に乗る可能性が大了。

私たち知床財団は、地域密着型でありながら、井の中の蛙になることなく、広く全国・世界の動きまでを視野に入れて行動していきたいと考えています。遠い将来を見つめながら、同時に足元を確かめつつ、一步一步着実に歩みを前に進めたいとも考えています。どれも、言うは易く、行うには、人の一生はあまりに短いようにも思われます。

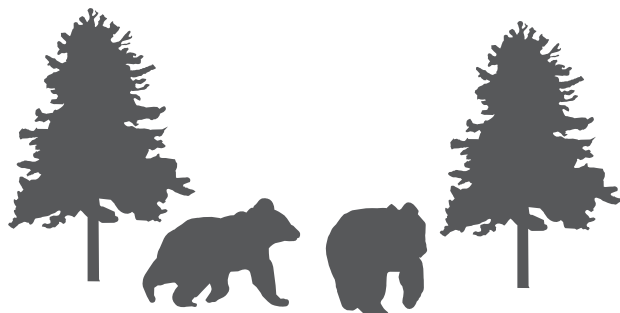
それでも、知床を愛し行動した先人たちに恥じぬよう、私たちは臆することなく切磋琢磨を続けていきます。皆様の変わらぬご支援を願ってやみません。

Ikuo Sekine

北海道小清水町出身。斜里町政に長く関わり、日本のナショナル・トラスト運動の草分けとなった『しれとこ100平方メートル運動』スタート後の昭和54年度からは、企画振興課長として、この運動を精力的に推進した。その後も斜里町助役、副町長を歴任。平成5年には知床の世界遺産登録を提案、当時の午来町長とともに登録に向けた取組に邁進し、知床の自然保護活動の歴史に新たな1ページを刻んだ。

[歴代理事長及び任期]

藤重千秋 1988年9月23日～1997年9月23日
法量 武 1997年9月24日～2003年3月31日
森 信也 2003年4月1日～2009年3月31日
関根郁雄 2009年4月1日～



2009年度の主な出来事

4月 APRIL

○知床岬エゾシカ密度操作実験 P.27参照
知床岬の貴重な植物群落の回復を目的に、エゾシカの個体数を減らすエゾシカ密度操作実験事業を流氷が去るのを待って実施しました。

○知床世界遺産センターオープン P.21参照
知床に住む動物の実物大の写真や、ヒグマの爪痕など動物の痕跡の模型を展示する知床世界遺産センターが4月19日にオープンしました。

その他 ●エゾシカライトセンサス ●知床五湖協議会 ●第1回理事会
●知床五湖高架木道開通

5月 MAY

○知床半島海域調査 P.28参照
環境省による「海域と陸域の一体的な保全に資する統合的管理手法に関する研究」の一環として各種調査活動を開始しました。

○知床財団だより初発行 P.12参照
イベント告知や活動紹介、自然情報などを盛り込んだ『知床財団だより』を発行し、斜里町・羅臼町の広報誌に折り込み、地元の方々に財団の活動をアピールしました。

その他 ●ウトロの学校でヒグマの授業 ●知床岬エゾシカ自然死亡個体調査 ●第2回理事会・第1回評議員会 ●斜里高校自然体験学習 ●ミニレクチャー実施 ●SEEDS春号発行

6月 JUNE

○知床五湖利用コントロール導入実験 P.30参照
ヒグマ対処法の認定を受けた引率者が同行するグループによる、遊歩道を利用するシステムの実験を6月に実施しました。

○知床世界遺産ルサフィールドハウスオープン
知床岬や知床岳などの一般の旅行者が普段訪れない地域を利用する登山者やシーカヤッカーなどに対し、ルールやマナー、現地の情報を提供する施設がオープンしました。

その他 ●羅臼高校ヒグマ授業 ●羅臼ビジターセンター観察会「アイヌ文化の遺跡観察」 ●知床キッズ「巣箱 望郷の森にて」 ●キムンカムイプロジェクト委員会 ●各種研修受入 ●運動地公開プログラム「番人の森の見方」

7月 JULY

○知床岬アメリカオニアザミ駆除 P.24参照
外来種であるアメリカオニアザミの駆除業務を2009年度も実施しました。

○第30回知床自然教室 P.26参照
全国から集まった仲間たちが、電気も何もない知床の森の中で1週間過ごしました。

その他 ●各種研修受入 ●知床キッズ「知床岬清掃」 ●遠音別シレットコスミレ調査 ●第1回知床世界自然遺産地域科学委員会の開催 ●知床国立公園マイカー規制開始

8月 AUGUST

○ミニレクチャー P.19参照
ゴールデンウィークに続き、夏休み期間中にも自然センターと羅臼ビジターセンターにおいて無料のミニレクチャーを開催しました。

○第一回財団法人改革検討委員会 P.32参照
公益財団法人への移行を目指した具体的な検討作業がスタートしました。

その他 ●各種調査活動の本格化 ●水の学校夏まつり ●JICA研修 ●SEEDS夏号発行 ●モジラジャパンによる「Discover shiretoko」キャンペーン

9月 SEPTEMBER

○自然教室30周年企画「知床への回帰」 P.26参照
知床自然教室の歴史、100平方メートル運動を考える知床自然教室30周年企画を実施しました。

○サクラマス産卵状況調査 P.8参照
100平方メートル運動地に隣接する岩尾別川・幌別川でサクラマスの個体数と産卵床の調査を行いました。

その他 ●羅臼・ウトロの学校でのヒグマの授業 ●各種レクチャー実施 ●知床キッズ「夜の動物」 ●河川工作物アドバイザー会議 ●第3回理事会・第2回評議員会

10月 OCTOBER

○「旭山動物園の知床ヒグマわくわくウィークエンド」 P.25参照
「旭山動物園の知床ヒグマわくわくウィークエンド」を旭川市旭山動物園で行いました。

○生物多様性 日本アワード受賞 P.13参照
(財)イオン環境財団と環境省により創設された「生物多様日本アワード」。知床財団は野生動物の管理や調査研究、森づくり活動など多岐にわたる活動を評価され、保全フィールド部門優秀賞を受賞しました。

その他 ●定山溪クマ対策研修 ●シカライトセンサス ●各種レクチャー実施 ●第3回財団法人改革検討委員会 ●第13回しれとこ森の集い(植樹祭)

11月 NOVEMBER

○第13回森づくりワークキャンプ P.26参照
100平方メートル運動参加者の皆さんが5泊6日寝食を共にしながら、森づくり作業に打ち込みました。

○「アラスカ・知床比較見聞録」 P.16参照
職員研修で訪れたアラスカのデナリ国立公園などでの体験を、関係者や地元の皆さま向けに報告しました。報告会は斜里町羅臼町あわせて4回開催しました。

その他 ●遊々の森協議会 ●ウトロ小学校環境授業 ●羅臼中学校職業体験受入 ●SEEDS秋号発行

12月 DECEMBER

○海棲哺乳類調査 P.25参照
トド・ゴマフアザラシの生息状況を調べるために、冬期に集中的な調査を行いました。

その他 ●中高一貫教育「知床学士」認定制度運営委員会 ●第4回理事会・第3回評議員会 ●ナショナルトラスト全国大会(東京)

1月 JANUARY

○自然センター館内イメージ改修 P.20参照
自然センター館内の雰囲気をもよほすために、柱と背面に木製パネルを設置しました。

○厳冬の知床岬でのエゾシカ捕獲 P.27参照
厳冬の知床岬でのエゾシカ捕獲を今年も行いました。

その他 ●海棲哺乳類調査 ●知床自然大学構想ワーキンググループ ●エゾシカ季節移動調査

2月 FEBRUARY

○ボランティアミーティング P.17参照
知床で活動するボランティアの皆さんが知床に集い、1年間の活動の振り返りや意見交換を行いました。

○自然センター館内イメージ改修第2期 P.20参照
1月の改修に加えて、ダイナビジョン入口通路2本の壁紙を貼り替え、写真展等のギャラリーとして活用できるようにしました。

その他 ●ヘリコプターを利用した知床岬エゾシカ捕獲 ●第3回ヒグマワークショップ ●第2回知床世界自然遺産地域科学委員会 ●SEEDS冬号発行

3月 MARCH

○エゾシカ航空カウント調査 P.27参照
知床岬でのエゾシカの越冬数や植生との関係などを調べるために、悪天の合間をぬって、セスナ機で上空を飛びながら、エゾシカのカウントを行いました。

○「よみがえれ知床」の発行
これまでの100平方メートル運動の歩みをまとめた書籍が朝日新書から出版されました。
当財団の理事長も著者として名を連ねています。

その他 ●羅臼ビジターセンター観覧会「オリジナルカレンダー作り」 ●第5回理事会・第4回評議員会

2009年度の決算概要

▼ 2009年度の総事業費は 242,228,342円^(※)

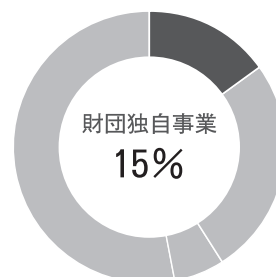
財団の事業費は1.財団独自事業、2.斜里町・羅臼町委託事業、3.その他委託事業、の大きく3つに分類されます。中でも、財団独自事業は賛助会員や寄付金が重要な財源となっています。賛助会員をはじめとする多くの方々の継続的なご支援により、2009年度は全56事業を行い、成果をあげることができました。

(※) 決算報告の当期支出計 246,495,768円 - 特定資産取得支出 4,267,426円

1.財団独自事業

(事業数 21 事業費 35,769,110円)

賛助会費や寄付金、知床自然センターでの販売物収入が主な財源となっています。「エゾシカ個体群の動態に関する調査研究」、「調査研究に関わる交流及び成果公表に関する事業」など全21事業を実施しました。

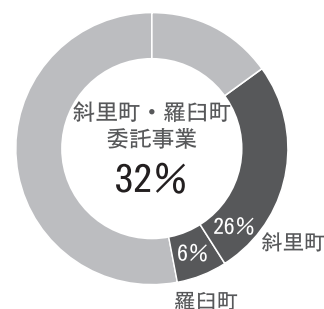


2.斜里町・羅臼町委託事業

(事業数 9 事業費 77,753,222円)

財団設立者である斜里・羅臼両町からの委託事業です。

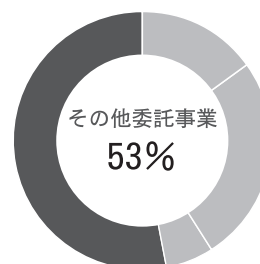
斜里町からは、知床自然センター等指定管理者業務やしれとこ100平方メートル運動の現地業務などを受託し、羅臼町からは羅臼ビジターセンター運営事業を受託しました。また両町からヒグマ管理対策事業、自然環境保護管理対策事業をそれぞれ受託し、全9事業を実施しました。



3.その他委託事業

(事業数 26 事業費 128,706,010円)

環境省やその他の機関から、各種業務を受託し、全26事業を実施しました。



▼ 2009年度の決算報告

				(単位：円)			
収入の部	計	一般会計	特別会計	支出の部	計	一般会計	特別会計
事業費収入	208,129,413	208,129,413	0	管理費支出	5,368,361	5,368,361	0
				事業費支出	216,051,667	216,051,667	0
寄付金収入	5,958,635	5,958,635	0	他会計への繰入金支出	600,000	0	600,000
管理費収入	5,449,290	5,449,290	0	普及研修事業費支出	20,208,314	0	20,208,314
他会計からの繰入金収入	600,000	600,000	0	特定資産取得支出	4,267,426	2,065,826	2,201,600
普及研修事業収入	18,281,914	0	18,281,914	当期支出計 (B)	246,495,768	223,485,854	23,009,914
雑収入	1,726,412	1,584,805	141,607	差額			
特定資産取崩収入	20,340,926	12,606,626	7,734,300	当期収支差額 (C=A-B)	13,990,822	10,842,915	3,147,907
当期収入計 (A)	260,486,590	234,328,769	26,157,821	前期繰越収支差額 (D)	17,819,520	-2,569,501	20,389,021
				次期繰越収支差額 (C+D)	31,810,342	8,273,414	23,536,928

web <http://www.shiretoko.or.jp/aboutus/kifukoui.htm>

▼ 2009年度の賛助会員の状況

	個人年会員	個人終身会員	法人年会員	法人特別年会員
2008年度末	669名	1,032名	31団体	2団体
2009年度末	617名	1,033名	36団体	2団体

この事業では、知床半島の生物群集を特徴付ける大型野生動物の生息状況に関する長期的なモニタリングや生態調査、遺伝的多様性に関する調査を行うほか、調査結果の発表などを行っています。この事業は寄付金、賛助会員などによりまかなわれています。

独自調査研究事業

エゾシカ個体群の動態に関する調査研究



▼ エゾシカの個体数の増減や行動に関する傾向を調べるために、知床岬地区において冬を越せずに死亡したエゾシカの数を知る自然死調査、斜里町、羅臼町内において道路沿いに出没しているエゾシカの数を知るセンサス調査などを実施しました。

知床岬でのエゾシカ自然死調査

2009年春の知床岬における自然死調査では、発見したエゾシカの死体はわずかに2体でした。これで、調査の際に確認した自然死体数が5体以下という状態が2007年春から続いています。2008年度のアニュアルレポートでは、自然死体の発見が少ないのは2つの要因が考えられると書きました。

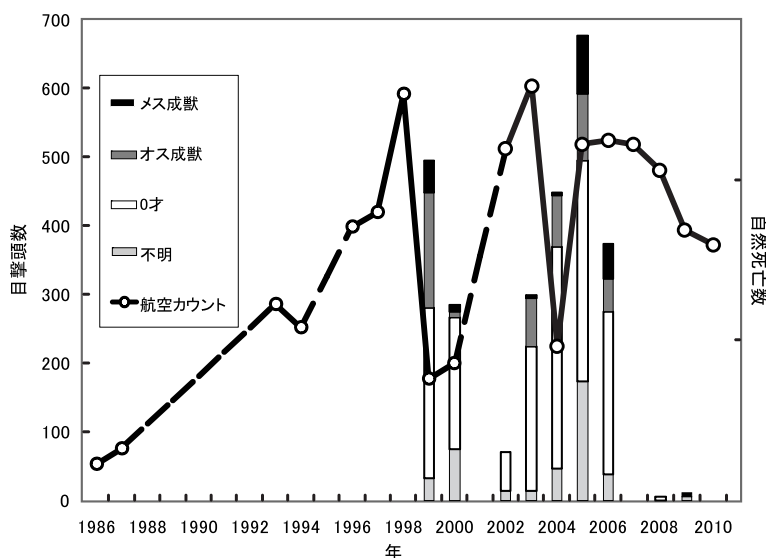
一つは実際にエゾシカがあまり死んでいない、つまり越冬死亡率が低い可能性、もうひとつはエゾシカの死体がヒグマに食われるため、死体発見率が低い可能性です。

一つ目の要因に補足すると、今年度で3年目になる知床岬でのエゾシカ捕獲（p.27参照）により、知床岬で越冬するエゾシカの数自体がかなり減っていることとも関係がありそうです。乏しい冬の餌を分け合うエゾシカの数が減ると、1頭当たりの餌の量が相対的に増えることになります。捕獲をまねがれたエゾシカにとっては、しのぎやすい冬になっているのかも知れません。

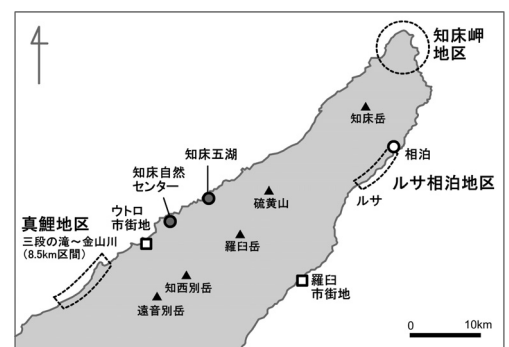
エゾシカ越冬数モニタリング

斜里町真鯉、羅臼町相泊周辺で行っている日中センサスの結果を見ると、真鯉、相泊どちらもエゾシカが多く見られ、雪も少なく、かつ雪の降り始めも遅く、やはりエゾシカには楽な冬だったようです。これまで見られたエゾシカが集結する時期等は変わりませんが、真鯉では最多664頭と、2007年から3年ぶりに700頭近いエゾシカが確認されました。ここ数年、狩猟とワナ捕獲で毎年800頭以上のシカが捕獲されていますが、減る様子はまだありません。相泊では、前年度には3月後半まで100頭以下だったのに対し、今年度は1月末から200頭前後が道路近くに下りていました。

これは雪の状態もありますが（昨年同時期は、道路法面上部がアイスバーン状態でエゾシカが法面まで降りにくい状態だった）、別事業（P.28）による餌付けの影響もあると考えられます。



▲ 航空機から目撃された知床岬の越冬シカ数（左軸）と死亡数（右軸）の変化。航空カウント（折れ線）の点線部分はデータなし。



▲ モニタリング実施箇所。



…寄付金・賛助会費により
実施している事業です。

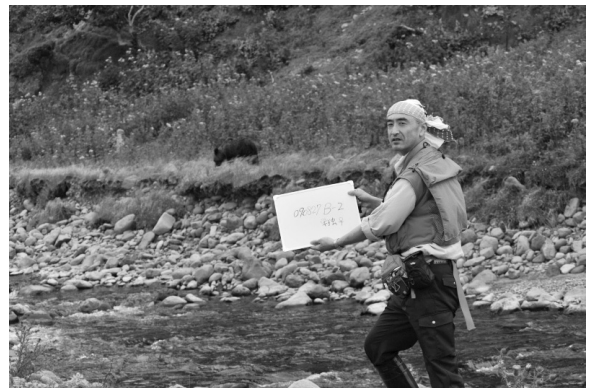
知床半島におけるヒグマの生態等に関する調査



- ▼ 知床を代表する野生動物であるヒグマの保護・人との共存を目的として、ヒグマの行動追跡調査や、人との軋轢を防ぐため、農地へのヒグマの侵入を防ぐ電気柵の試験などを行いました。

ヒグマの行動追跡

財団独自調査事業として行ってきたGPS標識によるヒグマの行動追跡調査、ルジャ地区における直接観察による個体識別と個体識別台帳の作成等については、2009年度は知床生物多様性保全推進支援事業の支援を受け、知床海と森の生物多様性保全協議会の委託事業として実施したため、P.25で詳しく記述しています。



▲ 外見的特徴からヒグマの個体識別を実施しました。

農地電気柵効果試験

ウトロ高原地区農地の電気柵効果試験について、2008年度にウトロ高原地区の農業者と知床財団が共同で既存の防鹿柵の一部を電気柵化し、ヒグマに対する効果を検証しています。現状では電気ワイヤーの設置区間が一部のため、効果が十分に発揮されているとは言えませんが、その管理方法も含めたノウハウの蓄積を地元農家の人々とともにを行っています。2010度には農地全体の電気柵化が完成する予定のため、本格的な効果検証を行うことができると思います。



◀ 電気柵が有効に機能しているかをチェックするスタッフ。

知床の生態系の保全・復元に関する調査検討事業

NEXT PAGE ▶



- ▼ 「100平方メートル運動の森・トラスト」による生物復元の取り組みとして、北見管内さけ・ます増殖事業協会の協力のもとにサクラマス発眼卵の放流が行われています。知床財団ではふ化状況の確認などその後の追跡調査を行っています。

サクラマスのふ化状況調査

2008年の秋期に岩尾別川支流の白イ川へ放流した15万粒のサクラマス発眼卵のふ化状況の調査を5

月に実施し、良好であることを確認しました。一方、9月には1999年から2001年までに幌別川と岩尾別川で放流したサクラマスが川に戻ってきているかどうかを

例年どおり調査しましたが、海から遡上してきたサクラマスを確認することはできませんでした。

また、11月には2008年に続いて白伊川へ20万粒のサクラマス発眼卵を放流しました。2010年の冬には、白伊川に設置されていた全てのダムの改良が終了し、サケやマスの遡上が可能になり、産卵場所が上流部へ広がりますので今後の変化が楽しみです。



▲ 河川に入って、サクラマスの稚魚を調査。

調査研究に関わる交流および、成果公表に関する事業



▼ 学会などでの発表を通じ、調査研究活動の成果を公表しました。また地元関係者との情報交換や職員の資質向上のため「しれとこゼミ」を開催しました。

調査研究に関わる交流

2009年10月3～9日の7日間に、東京農業大学のプロジェクトで「サハリン州水域生物調査」が実施され、当財団からは魚類担当として1名が参加しました。2009年度で3年目となり、サハリン中南部の沿岸域、汽水域や河川でこれまでに6目17科30種の魚類を確認しました。

学会等での成果発表

日本野生動物医学会（2009年9月富山）に1名が参加（口頭発表）、日本哺乳類学会大会（2009

年11月台湾）に1名が参加（ポスター発表）、日本生態学会大会（2010年3月東京）に1名が参加（口頭発表）しました。

しれとこゼミ

知床自然教育研修所（斜里町ウトロ）等を利用した「しれとこゼミ」を開催し、財団職員のほか、地元自然ガイド、行政関係者、調査で滞在中の学生など、計268人の参加がありました。

ゼミは計11回開催し、講演の内容は18タイトルに及び、様々な分野の発表が行われました。

しれとこゼミ講演タイトル（抜粋）

「富士山と知床ー2つの公園をめぐる3つのインスピレーションー」
 「リスと私の1年間」
 「上高地でのアクティブな日々」
 「林業と生物多様性保護を両立させる森林資源管理～スウェーデンでの取り組みについて」
 「スウェーデンの森林における生物多様性保全について～マルチスケール・モデル 導入のケーススタディ」
 「知床ボランティア活動施設と知床森林センターの紹介」
 「自然公園利用者の行動と意識の調査研究から適正利用を考える」
 「こんなに近くて大丈夫！？カトマイのクマ」
 「星野道夫も愛したデナリの楽しみ方」
 「自分の身は自分で守れ！？アラスカ郊外ウラ事情」
 「北海道のシカ、大台ヶ原のシカーそれぞれの採食生態」
 「知床半島東部におけるエゾシカの季節移動」
 「知床半島におけるエゾシカの遺伝学的多様性について」
 「日本紅斑熱～野生動物が関わる感染症のリスク評価～」

水域における生物群集モニタリング調査



▼ 知床の海域や河川に生息する生物のモニタリング調査を、財団の独自事業として継続して実施しています。

海藻類分布調査

藻類分布調査は、海藻の種類・量が最も多くなる春から初夏にかけての大潮の時を狙って、知床岬にて2回行いました。

41年前の資料と比較したところ、たくさん生えていて目立つ海藻にほとんど違いが見られませんでした。



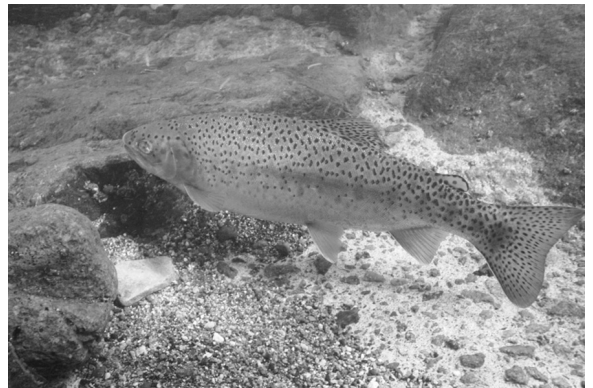
▲ 41年前の知床岬。「羅臼海域の昆布に関する総合調査報告書」1985年 羅臼漁港協同組合発行より転載。



▲ 現在の知床岬。

外来魚侵入状況調査

外来魚侵入状況調査は、秋に斜里側の2河川（幌別川、岩尾別川）、羅臼側の4河川（ルサ川、モセカルベツ川、知円別川、知西別川）で行い、ルサ川と知西別川で外来魚であるニジマスを確認しました。ルサ川でのニジマスの確認は、世界遺産地域内の河川での初記録でした。今後は遺産地域内を中心に調査を進める予定です。



▲ 調査で発見した外来魚のニジマス。

深海魚調査・浅海域生物相調査

羅臼漁港の深層水汲み上げ施設によって捕獲される深海魚調査は、羅臼町役場と羅臼漁業協同組合の協力のもとに北海道大学と共同で2008－2009年度の2年間に実施し、未記載種（新種）と考えられる5種を含む32種を確認しました。

また、環境省の事業である浅海域生物相調査の補完調査を北海道大学と東京農業大学と共同で実施しました。

魚類リスト作成

知床周辺海域の魚類リスト作成を斜里町立知床博物館と共同で随時実施しています。まずは、博物館の標本室に保存されている魚類標本の整理から行っています。

財団活動事業

知床自然センター、および羅臼ビジターセンターインフォメーション事業



- ▼ 知床自然センターと羅臼ビジターセンターのインフォメーションカウンターを拠点に、知床の自然情報や交通情報、登山やトレッキング等に関する問い合わせ、簡単な旅行の助言などを、財団ならではの専門性を加味しつつ実施しました。また、対応の際には、ルールやマナーのほか、ヒグマの目撃情報や遭遇時の注意点など、知床の自然を適切かつ安全に利用してもらうための情報提供を併せて行うよう努めています。

知床自然センター

知床自然センターでは、知床をフィールドとして活動するネイチャーガイドとの関係を深め、自然情報や散策道情報等の聞き取りなどで情報共有を図り、ビジターに対する効果的な案内に役立てることが出来ました。また、近年増加している外国からのお客さんにも積極的に話しかけるよう心がけました。今後も、知床のスペシャリストとしてどんな問い合わせにも対応できるよう、かつ、明るく笑顔のあるインフォメーションを目指します。

羅臼ビジターセンター

新しい羅臼ビジターセンターがオープンして3年目となりますが、依然来館者は増加傾向にあります。それに対応するために、インフォメーション関係資料などの収集と整理を行うとともに、来館者や問い合わせに対してのより効率的かつ効果的な情報提供に努めました。



- ▲ 羅臼ビジターセンターインフォメーションカウンターでのビジター対応。子どもが触って楽しめるハンズオングッズも充実しています。



- ▲ 知床自然センター館内。ゆっくり過ごしていただけるよう、休憩スペースと書籍閲覧コーナーを併設。



- ▲ 羅臼ビジターセンター館内。シャチの骨格標本やトドのはく製が展示されています。

2009年度に開催したロビー展

▶ 知床自然センター

- ・佐藤孝人写真展
- ・遠藤辰男写真展
- ・ウトロの子どもたちのヒグマ新聞展
- ・田中豊美原画展
- ・知床写真倶楽部写真展
- ・あかしのぶこ絵本原画展

▶ 羅臼ビジターセンター

- ・石井輝章写真展
- ・倉沢栄一写真展
- ・羅臼海上保安署パネル展
- ・ヒグマ展
- ・子どもたちによるヒグマ新聞展
- ・羅臼町民ダイバー写真展

会員サービス事業



- ▼ 当財団の活動に支援をいただいている賛助会員に向けた会報誌の発行や、会員向けサービスの企画を行っています。

会員入会状況

2009年度の入会状況は、個人年会員の新規入会は88口、更新数は516口、合計が604口。個人終身会員の新規入会は6口。法人年会員の新規入会は5口、更新が30口、合計が35口。2007年度に設けた法人特別年会員への新規入会者はなく、更新は1法人(1口)でした。新規入会者数、更新数共に減少傾向にあるため、より多くの方々が当財団の活動に賛同いただけるような方法を検討していく必要があります。

会報誌「SEEDS」

賛助会員向けの会報誌である「SEEDS」は、2009年度から年4回の季刊に変更、オールカラーで内容も大幅リニューアルしました。写真も見やすく、内容も読みやすいと概ね好評です。新たに会員の皆さまからのご意見を掲載するコーナーも設け、会員の皆さまと知床財団をつなぐ定期便としての役割をさらにパワーアップさせることを目指しています。



▲ 会報誌SEEDS。2009年度より大幅リニューアルを行いました。

2009年度のSEEDSの主な掲載内容

春号	旭山プロジェクト 「旭山動物園にしれとこシカ絵巻ができるまで」
夏号	知床半島横断レポート
秋号	知床の秋 いただきます 「知床への帰帰」開催レポート
冬号	エゾシカ追跡24時間 「知床ヒグマわくわくウィークエンド」開催報告

地域向け財団活動紹介・情報提供事業



- ▼ 知床財団の活動に対する地元の理解と協力を得るために、斜里・羅臼町民に向けた財団活動紹介を行っています。

財団活動の紹介

2009年6月より、地元の住民の方々を対象に、知床の旬の自然情報や当財団の活動・イベント情報をお知らせする「知床財団だより」を月1回、斜里・羅臼両町の広報誌に折り込みました。読みやすい自然情報の記事を通じて、知床財団の名前にも親しんでいただければと考えています。

また、町民の方々にも知床財団や知床の自然への理解や親しみを深めていただく機会を増やすために、両町の役場や図書館などの公共施設にSEEDS閲覧用のファイルを設置する取り組みも引き続き行っています。地元の宿泊施設・観光関係者の方々に

は、より広く当財団の活動を知っていただこうと、SEEDに加え、当財団がその年に取り組んだ活動をまとめた年次報告書「アニュアルレポート2008」を配布しました。



地域向け情報誌
「知床財団だより」

寄付拡大推進事業



- ▼ 賛助会費や寄付金収入は当財団の活動を支える大きな基盤となっており、館内展示やホームページ、発行物を通じて、財団の活動に対する支援、協力を広く呼び掛けています。

施設内の募金箱

財団活動に対する支援を募るため、2002年度より知床自然センター内に募金箱を設置しています。2009年度は約61万円台となりました。知床自然センターへの入館者数が大幅に減少していることが、募金額の減少に影響していると考えられますが、それでも繁忙期には毎月10万円以上の募金をいただきました。

羅臼ビジターセンターに設置した募金箱は、入館者が館内で動く導線を工夫するなどして、前年度より3倍増しの募金を集めることができました。

2009年度の一般寄付の状況

2009年度に一般寄付としてお寄せいただいた件数は53件、合計701,125円に上りました。企業等からのご支援としては、札幌テレビ株式会社様、日本損害保険代理業協会様からご寄付をいただきました。

また、イオン環境財団と環境省が創設した生物多様性日本アワード優秀賞の副賞として50万円を頂きました。

< 知床財団 賛助会員制度の御紹介 >

<http://www.shiretoko.or.jp/supporter/supporter.htm>

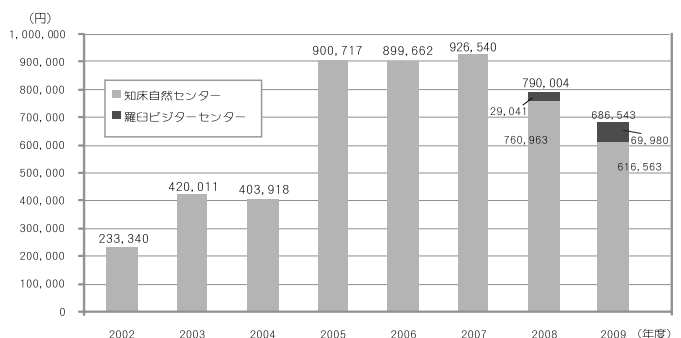
ホームページでの呼びかけ

知床自然センター・羅臼ビジターセンター館内展示や財団ホームページでは、賛助会員募集や寄付の呼びかけ、そして寄付のお礼の掲載に力を入れ、継続的な支援が知床財団の活動の支えになっていることを伝えています。



◀ 第1回生物多様性日本アワードを受賞しました。

募金箱への寄付額の推移



財団ホームページによる広報活動事業



- ▼ 財団の活動に対する理解と支援の輪を広げる「伝える活動」の主軸として、ホームページでの情報発信を継続して行っています。

ホームページの更新状況

専門的な知識がなくても簡単に情報を更新できるブログ形式のページでは、「財団の最新の活動」を伝えるページを35回、「知床の旬の自然情報」を伝えるページを317回更新するなど高い更新頻度を保ち、ほぼ毎日新しい情報を発信してきました。

知床キムンカムイプロジェクトの一事業として作成したヒグマ貸出教材であるトランクキットを紹介するページを新設しました。

< (財)知床財団公式サイト >

<http://www.shiretoko.or.jp>

自然系施設とのネットワークづくり、環境教育、しれとこ100平方メートル運動地の公開システムの検討などを行っています。この事業は寄付金、賛助会費などによりまかなわれています。

自然教育活動開発研究事業

しれとこ100平方メートル運動地保全・公開システム検討事業



- ▼ 本事業は、斜里町主催「100平方メートル運動の森・トラスト」の長期目標の一つとして掲げられている「トラスト資産としての100平方メートル運動地の適正な公開と保全のシステムを構築」に向け、運動の現地業務を担う知床財団が斜里町と連携を図りながら独自事業として取り組んでいるものです。

運動地公開プログラム

2009年度は、運動の趣旨に賛同する企業や団体、教育機関を対象に、運動地を歩きながら100平方メートル運動や開拓の歴史などを紹介し、実際の森づくりの作業も経験していただく運動地公開プログラムを行いました。地元の斜里高校の生徒を始め、運動へのご支援をいただいたKDDI（株）「au知床walk」の皆さまや日本赤十字北海道看護大学の学生など約200人が、知床の森を訪れ、運動と森づくりに触れていきました。

その他にも6月には、森の番人が一般の方々を引率して解説を行う「番人の森の見方」を実施しました。また、冬期の「スノーシュー・歩くスキーコース」では、運動地と森づくり作業を紹介する地図を観光客の方々や地元の皆さんに配布しご利用いただくな

ど運動の普及と公開に向けた取り組みを行いました。

今後も、保全と利用のバランスを考慮した運動地の利用の在り方を探るとともに、100平方メートル運動をたくさんの皆さんに伝えていくための取り組みを進めていきます。



▲ 100平方メートル運動を支援していただいたKDDI株式会社による「au 知床 walk」



▲ 100平方メートル運動地で行われた斜里高校の植樹。

道東自然系施設ネットワーク推進事業



- ▼ 道東各地に散在するネイチャーセンターやビジターセンターなど13施設が加入している道東自然系施設ネットワークの事業運営に積極的に参加しました。

ネットワークへの参加

このネットワークは2000年度から試行的にスタートし、2004年度に正式に発足、その後2006年度まで当財団がネットワーク代表および事務局として運営を担いました。2007年度より事務局業務からは外れたものの、引き続きネットワークの事業運営に積極的に参加しています。

道東各地のフィールド最新情報を各施設が交換し合って掲示する「はしご情報」、各地域の旬の見所を一覧できる「月間いきもの予報」に対して、当財団からも随時情報を提供しました。

施設の展示や教育プログラムをより洗練させるために、各施設のスタッフが集まり課題や改善方法などを評価・共有し合う「施設相互研修」にも積極的に参加しました。



◀ 厚岸で行われた道東自然系施設ネットワーク総会

道東自然系施設ネットワーク参加施設

- ① 知床世界遺産センター
- ② 知床自然センター
- ③ 羅臼ビジターセンター
- ④ 別海町野付半島ネイチャーセンター
- ⑤ 根室市春国岱原生野鳥公園ネイチャセンター
- ⑥ 霧多布湿原センター
- ⑦ 厚岸水鳥観察館
- ⑧ 塘路湖エコミュージアム
- ⑨ 温根内ビジターセンター
- ⑩ 鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ
- ⑪ 阿寒国際ツルセンター
- ⑫ 阿寒湖畔エコミュージアムセンター
- ⑬ 川湯エコミュージアムセンター



▼ 地域が支える世界遺産・知床を目指して、知床の自然とその自然に携わる人々の活動をより深く知ってもらう機会を様々な形で地域に提供しています。

学校教育

①斜里町の学校

学校教育では、ウトロ小中学校全校生徒を対象にクマ授業を実施しました。毎春恒例となっているこのクマ授業は、ヒグマに出会った時の対処法を中心として、いろいろな切り口から身近な自然に対して子供たちが想像したり、発見したり、そして自分たちで考えてみたりする手伝いができるよう毎回スタッフが趣向を凝らして行っているものです。

また、総合的な学習の時間として、ウトロ中学1年生の野外活動、ウトロ中学3年生の「自然を守るために私たちができる環境保全とは？」と題する授業などを行いました。



▲ 知床世界遺産センターで行ったウトロ小学校の環境教育の様子。

②羅臼町の学校

羅臼の中学校・高校一貫教育のカリキュラムとして行っているヒグマ授業も3年目となり、ヒグマの疑似テレメリー調査を体験するなどの野外実習を取り入れた授業を開始しました。また、中・高一貫教育のカリキュラムとは別に、羅臼小学校と春松小学校でもヒグマ授業を行いました。年度中に実施したヒグマ授業は、計7回、受講した児童・生徒数は延べ316名となっています。

また、羅臼町教育委員会などと共に、羅臼町

内の小学生を対象にして、知床キッズ（羅臼町ふるさと体験教室）を、5月から3月までの間に計8回実施しました。



▲ 羅臼高校でのクマ授業テレメ体験の様子。



▲ かんじきをはいて冬の三角山に登りました。（知床キッズ）

一般向け

知床博物館と共催で知床自然史講座を開催、現在知床で起こっている様々問題についての講演などを行いました。

また、ヒグマの被害が実際にあった水産加工業者に対して、加工時に出る魚の内臓などの保管、扱いなど、ヒグマの対応方法について、羅臼町役場と共に指導や注意喚起を行いました。

職員の技術知識を高めるための研修事業



▼ 野生生物の保護管理や国立公園の管理運営の先進事例を学ぶための先進地視察や、インタープリテーション技術の向上のため研修会への参加をし、スタッフの技術知識を高めました。

先進地での研修

ヒグマをはじめとする野生動物の保護管理や、国立公園の管理運営の先進事例を学ぶため、アメリカのアラスカ州に2名のスタッフを9月に2週間研修に派遣しました。アメリカ国立公園局による全面的支援と案内のもと、野生のヒグマ・ウォッチングが人気を集めるカトマイ国立公園や、シャトルバスのシステムで有名なデナリ国立公園などを訪問し、実際の現場を現地の担当者と一緒にめぐりながら、知床に多くの知見をもちかえることができました。



▲ アラスカのカトマイ国立公園内。ヒグマを安全に観察できる高架デッキが設置されています。

研修内容の還元

得られた知見を還元するために、知床国立公園関係者の他、一般の方々向けの報告会を4回にわたり実施しました。

研修で得られた内容をわかりやすくまとめたこの報告書は、今後の国立公園の在り方について考える有意義な企画だったという評価をいただきました。

(※2010年度の実施となりますが、環境省職員に対して、先進地の野生動物の保護管理・国立公園の運営管理の報告を行い、今後の知床国立公園の在り方についての意見交換会も行っています。)

今後の先進地研修

2008年度に実施された財団20周年事業において開拓した、アメリカ合衆国国立公園局アラスカ地区事務所との交流継続・連携協力の強化を検討しています。

また、国立公園等の管理運営のノウハウを吸収するための研修を行うとともに、次のステップとして、地元関係者による現地視察や相互交流について準備を進めています。



▲ アラスカ研修報告会

講演タイトル

第1回報告会 「こんなに近くて大丈夫!?カトマイのクマ」

第2回報告会 「星野道夫も愛したデナリの楽しみ方」

第3回報告会 「自分の身は自分で守れ!アラスカ郊外ウラ事情」

第4回報告会 「知床×アラスカ ヒグマたちの今」

(※環境省事業の枠で開催)

その他の研修会への参加

活動紹介ツールの拡大や洗練の手法を探る講座に、チラシやパンフレットなど広報物の作成方法を学ぶ講座、様々な意見の出される会議などをうまくまとめるファシリテーション技術を学ぶ講座等、各地で行われた研修会に参加しました。

ボランティア活動推進事業

ボランティア活動推進事業



▼ 知床の自然のために何かしたい、そんな思いや気持ちを持っている方を対象に、知床財団では森づくり作業や普及活動などをお手伝いいただくという形でボランティア活動の場を提供しています。

ボランティア参加者

2009年度末でのボランティア登録者数は194名、その内の73名の皆さんが知床を訪れ、森づくり作業などのボランティア活動に参加し汗を流しました。総活動日数は42日間、延べ133人の力が知床に集まりました。参加していただいた方の年齢層は、10代から60代まで幅広く、また道内のみならず遠くは東京や名古屋などからもたくさんのボランティアの皆さんに駆けつけていただきました。

活動内容

活動内容は、「100平方メートル運動の森・トラスト」の現場での森づくり作業から屋内での展示作成まで多岐に渡っています。特に森づくり作業では、苗木を育てている苗畑の草取りや防鹿柵の支柱の交換作業などたくさんの人手が必要な仕事が多くあり、ボランティアの皆さんのご協力が不可欠なものとなっています。また、2月には一年の活動を振り返る「ボランティア・ミーティング」を開催しました。

活動の紹介

知床財団のボランティアホームページでは、それぞれの活動報告を掲載しています。また、2009年度のボランティア活動のまとめとして「ボランティア通信」を作成し、一年間お世話になったボランティアの皆さんへお送りしました。

ボランティアの皆さんがこの活動を通して、知床の自然環境の保全に貢献するだけでなく、知床の自然に触れ、そして理解を深めることで、これからも知床を応援する気持ちをもっていただければ幸いです。

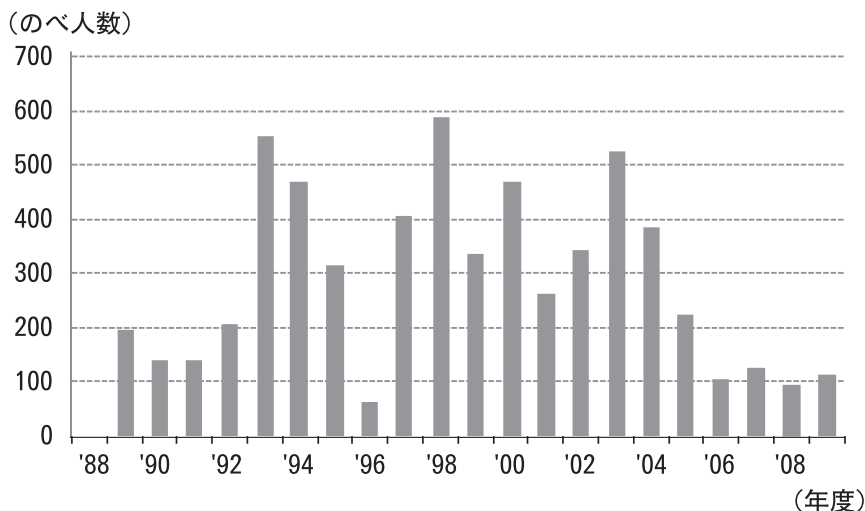


▲ 防鹿柵の改修作業。森づくり作業はボランティアの皆さんに支えられています。

＜ボランティアについて＞

<http://www.shiretoko.or.jp/intern/volunteer.html>

■ ボランティア活動者数の年別推移



◀ 2006年度にボランティアの受け入れ体制が変わり、活動日と活動内容を明確化して募集を行う方式になりました。活動日数は減少しましたが、以前よりも効率的に作業を進めることが可能になっています。

普及事業

普及資料等販売および写真貸出し事業

- ▼ 知床自然センターと羅臼ビジターセンターのインフォメーションカウンターで、知床の自然や動物に関する知識を深める書籍類や、ルールやマナーを普及するパンフレット、自然観察や登山道沿いの植生保護などに役立つアウトドア用品の販売、レンタルを行いました。

普及資料等販売

2008年度から販売を開始した登山用携帯トイレが、2009年度は知床自然センター、羅臼ビジターセンター合計で219個販売できました。また知床財団のロゴマークをプリントしたオリジナルエコボトルや、オリジナルクリアファイルが好評でした。散策の際に役立つ長靴、双眼鏡のビジターへの有料貸出しを知床自然センターで行い、長靴は586件の貸出しがあり、前年度の349件から大幅に増加しました。

写真貸出

情報提供事業の一環として行ってきた写真貸出し

は、18件ありました。また、日本ユネスコ協会の世界遺産普及展示パネルおよび環境教育教材、また富山市科学博物館の北海道の生き物特別展への協力など、普及啓発要素の高い非営利の画像貸出にも対応しました。



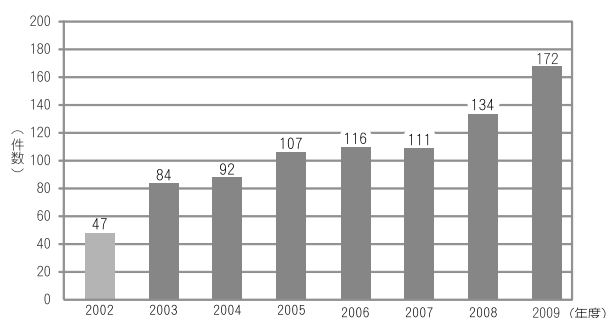
◀ 人気の知床財団オリジナルエコボトル。

ヒグマ対策普及事業

- ▼ ヒグマが高密度に生息する知床では、万に備えたヒグマ撃退スプレーは必需品です。知床でのヒグマ撃退スプレー携帯を普及させるための貸出事業を行いました。また、ヒグマから食料を守るためのフードコンテナの貸出も行いました。

ヒグマ撃退スプレー・フードコンテナの貸出し

知床における安全対策上大きな効果のある「ヒグマ撃退スプレー」、「フードコンテナ」の有料貸出しを行いました。貸出しは、知床自然センターと羅臼岳登山道入り口にある木下小屋のほか、2009年度からは羅臼ビジターセンター、ルサフィールドハウスでのレンタルも開始し、より多くのビジターが安全に知床国立公園を利用することができるようになりました。



- ▲ ヒグマ撃退スプレーの貸出件数の推移。(2002年度は試験的に貸出しを実施)。貸出件数は増加傾向にあります。

貸出し件数は知床自然センター48件、木下小屋106件、羅臼ビジターセンター14件、ルサフィールドハウス4件でした。また、近年増えつつある外国人観光客への対応の為、英語の貸出し契約書を作成しました。

2009年度は、ヒグマにテントを荒らされる事例があったためフードコンテナの利用推奨を図りました。今後さらなる普及が必要となり、館内展示と絡めて必要性をアピールしていきたいと思います。



◀ フードコンテナ (左) とヒグマ撃退スプレー (右)

＜クマスプレー・フードコンテナの使用方法＞

http://www.shiretoko.or.jp/bear/bear_10.htm

研修実習事業

知床の自然保護活動についての体験型教育プログラム事業



- ▼ 知床の自然の魅力や知床が抱える課題、当財団の活動などについて、実際の骨格標本や毛皮、小道具などを使いながらわかりやすく解説するミニレクチャーを開催しました。

ミニレクチャー

ゴールデンウィークと夏休みの期間に『ミニレクチャー』を無料で行いました。ゴールデンウィークは4月29日～5月5日までの7日間、夏休みは7月26日～8月22日までの28日間実施しました。『ミニレクチャー』はスタッフの「伝える」技術を高めるための研修としても位置づけ、係・担当を超えて多くのスタッフがレクチャーに携わったほか、インターンシップの学生が知床での活動をまとめ発表する場としても活用しました。



◀ 知床自然センターのロビーで開催されたミニレクチャー。20分間の無料のレクチャーで、知床のヒグマやシカ、森について話しました。

研修・実習受け入れ事業

- ▼ 当財団が担う野生動物保護管理、調査研究や公園管理の実績を反映し、研修・実習の受入、視察の対応などを行いました。

受入実績

知床には、豊かな自然のみならず、ヒグマと共存するための努力、自然を守るための各種制度を整えてきた歴史や数百年の時の流れを必要とする森づくり活動など、自然と人間が共存するための様々な取り組みがあります。そして知床にはそれらを体験できる現場があります。

財団が担う野生動物保護管理、調査研究や公園管理の実績を反映した研修プログラムとして、国際協力機構(JICA)主催の海外からの研修生向けの研修や、エジンバラ大・北大獣医学部生の研修などを受け入れました。また環境教育や調査研究、地域振興の現場で活躍する人材の就業体験の場として、インターンシップを4大学から8名受け入れました。

他にも、道内外の各種団体からの講演依頼、知床でのレクチャー対応、行政視察などの受入れ対応を通じて、知床の価値を広く伝える活動を行いました。



◀ JICA研修。ヒグマの捕獲調査についてレクチャーを行うスタッフ。

2009年度の主な研修受入・講演・視察対応等実績

研修受入・講演依頼・レクチャー対応	・西武学園文理小学校	・斜里高校
	・日本赤十字北海道看護大学	・ウトロ小中学校
インターンシップ受入	・北見北斗高校	・小清水高校
	・京都大学	・公文進度上位者の集い
行政視察対応	・酪農学園大学	・電機連合
	・東京農業大学	・春国岱ネイチャーセンター
	・JICA	・北海道大学
	・エジンバラ大学	
	・日本大学	・岩手大学
	・琉球大学	・岐阜大学
	・川越市議会	・水戸市議会
	・足利市議会	・飯田市議会

＜視察・講師派遣・レクチャーについて＞

http://www.shiretoko.or.jp/pr_release/sisatsu.htm

＜インターンについて＞

<http://www.shiretoko.or.jp/intern/intern.html>

斜里町、羅臼町、環境省、その他の機関から施設管理や、知床の保護管理に関する各種事業を受託し、実施しました。

受託事業

指定管理者業務（斜里町委託業務）

▼ 斜里町の公の施設に係る指定管理者に関する条例に基づいて、公園利用施設の管理運営業務を受託しました。

知床自然センター

施設及び園地周辺施設の維持管理、映像展示館（ダイナビジョン館）の運営と料金徴収等の業務を行いました。映像展示館の入館者数は30,975名で、前年度より15,677名（前年度比△33.6%）減少し、1988年の設置以来過去最低の数字となりました。

このような状況を改善するために、映像館の古さをカバーすることを目的として知床自然センター館内のリニューアルを随時行いました。小規模ではあるものの、創意工夫を加えて、館内のイメージがだいぶ良いものになりました。それに加えて、今後の施設内外の大規模リニューアルの企画検討も行いました。

知床自然教育研修所

ボランティアや外部研究者が活動する際の拠点となる知床自然教育研修所の維持管理を行いました。2009年度は延べ206名（909泊）の利用がありました。また、知識・技術の向上を図り交流を進める「しれとこぜみ」の場としても活用されました。

知床五湖レストハウス

知床五湖レストハウス、及び関連施設の維持管理を行いました。秋の閉園後は、2011年度の新施設

建築に備え、レストハウスの取壊しに関わる各作業を行いました。

知床五湖園地夜間閉鎖業務

ヒグマに関わる安全管理対策、およびオートキャンプによるゴミなどの散乱防止のため、町道知床五湖道路入口を閉鎖して夜間の園地内への立ち入りを制限しました。



◀ インフォメーションカウンターに知床の自然情報や交通情報を伝えるモニターを設置しました。



◀ サポーターの皆さまをご紹介しますコーナー。当財団の活動が見てわかるスタッフ手作りのジオラマを設置しました。

羅臼ビジターセンター関連管理運営業務

▼ 羅臼ビジターセンターの運営を円滑に進めるために、来館者対応や各種問い合わせ、情報提供、イベント実施等の運営事業を行い、施設管理全般については環境省と協力して実施しました。

羅臼ビジターセンター（羅臼町・環境省委託業務）

ビジターセンターの来館者数に関しては、2007年の移転新築以降、3年間増加し続けており、2009年度は34,123名となり前年度比107パーセントでした。

繁忙期にはスタッフが知床の自然に関する10分程度のミニレクチャーを行ったほか、期間限定の特別展示や、各種研修、視察・講演、就業体験などの依頼にも対応しました。

昨年2月からシャチの骨格標本が新たに常設展示

に加わったことや、好評なハイビジョン映像が口コミで伝わっているためと思われ、羅臼町周辺の町村からの来館者などが目立ちました。



◀ 羅臼ビジターセンター内で行われた無料ミニレクチャー。

世界遺産センター関連施設運営環境教育業務

▼ 2009年に新しく整備された二つの施設において、利用者へのレクチャー・情報提供業務を行いました。

知床世界遺産センター（北海道委託業務）

2009年4月19日、世界自然遺産となった知床の素晴らしさや、その素晴らしさを守っていくためのルールやマナーを伝える施設として新規オープンしました。

当財団は、来館者を対象に館内でのレクチャーや館内の実際に手にとって触ることのできる小道具や教材を利用した普及啓発、インフォメーション業務を担当しました。2009年4月20日から2010年3月31日までの間に76,881名の来館者がありました。



▲ 館内のパネルやハンズオングッズを用いてレクチャーを行っています。

ルサフィールドハウス（羅臼町・環境省・北海道委託業務）

2009年の6月に新規オープンしたルサフィールドハウスでは、知床半島先端部利用者へのレクチャーや、海に重点をおいた展示解説や情報提供を行いました。

施設の管理運営や一般の来館者対応を行うと共に、先端部利用に関しての問い合わせや情報提供と、ヒグマ撃退スプレーやフードコンテナのレンタルを行いました。



▲ ルサフィールドハウスの外観。

斜里町ヒグマ・自然環境管理対策業務（斜里町委託業務）

▼ 斜里町一円のヒグマに関する危機管理・出没状況のモニタリング、普及啓発及び対応時の猟友会との連携など、現地対応に重点をおいた対策事業全般を実施しました。また、自然環境保全のためのパトロールや普及啓発、傷病鳥獣の受け入れ、ライトセンサスによる野生動物の生息動向調査、エゾシカ有害駆除個体の下顎骨の処理・分析等の業務を行いました。

ヒグマ対策

①ヒグマの目撃件数と対策活動

斜里町内におけるヒグマの目撃件数は686件、対策活動は計493件に及びました（2009年3月からの1年間を集計）。いずれも一市町村の数字としては全国でもとび抜けて多い件数です。対策活

動の内訳は、ヒグマの出没に伴う緊急出動や追い払い等の直接的な対応が318件、ヒグマの出没やヒグマとの危険な遭遇を未然に防ぐための活動（ヒグマを誘引するエゾシカ死体やゴミの除去、遊歩道のパトロール、注意喚起のための看板の設置、電気柵の設置や保守管理）が175件でした。

②知床五湖でのヒグマ対策

知床有数の観光地である知床五湖において、観光客とヒグマとの危険な遭遇を未然に防ぐために、日常的なパトロールや周辺地域における標識付きヒグマの有無の確認作業を毎日実施しました。また、ヒグマが知床五湖に頻繁に出没する時期には、ヒグマの侵入経路を遮断する電気柵を遊歩道沿いに設置しました。

③ウトロ市街地・斜里町内農地

電気柵に囲われたウトロ市街地では、ヒグマの目撃が2件でした。2007年から稼働している電気柵が効果を発揮していると考えられます。ウトロ高原や日の出、峰浜、朱円東、越川の農地では、5月上旬からヒグマの出没が本格的に確認され、6月下旬以降、ヒグマによるビート・小麦への農作物被害が発生しました。斜里町から出動を要請した猟友会員と連携して情報収集や対応にあたりました。

自然環境保護管理対策

①傷病鳥獣の受け入れ

傷病鳥獣の受け入れ件数は34件で、その内訳はエゾシカが18件、エゾシカ以外の哺乳類・鳥類が16件でした。



▲ 海岸に打ち上げられた鯨類の除去作業。

②外来種の調査

外来種として特段の注意をはらっているアライグマに関しては、目撃情報が1件、日の出地区で報告されました。

③ライトセンサス

夜間、車で走りながら周囲をライトで照らし、発見した動物の種類・数をカウントするライトセンサス調査は、春期と秋期に各5回、幌別地区と岩尾別地区においてそれぞれ行いました。

④エゾシカ下顎骨の計測

有害駆除されたエゾシカ365頭分の下顎の骨について年齢査定や各部の計測を行いました。



▲ 車道付近に出没したヒグマ。人が集まる場所に現れたヒグマを追い払います。

羅臼町ヒグマ・自然環境管理対策業務（羅臼町委託業務）

- ▼ 人とヒグマの軋轢を解消もしくは軽減するために、羅臼町一円のヒグマに関する危機管理・出没状況のモニタリング、普及啓発及び対応時の猟友会との連携など、現地対応に重点をおいた対策事業全般を実施しました。また、自然環境保全や野生鳥獣との共存のために、現地調査、パトロール、啓発事業、傷病鳥獣の受入、野生生物の生息調査や保護管理業務を羅臼町と連携して実施しました。

ヒグマ対策

2009年度は対応件数175件、目撃件数169件となり、過去最高件数となった2008年度よりさらに増加しています。

7月から8月にかけては、これまで記録の無かった羅臼町中心街で、夜間に自動撮影および目撃されたヒグマがあり、羅臼町役場裏手の羅臼川河川敷にヒグマ捕獲檻を設置するという、これまでは無かった状況が生まれました。

9月には、知床岬を目指すトレッカーが、ヒグマに食料とテントを荒らされるという事例が発生しており、これ以降環境省などから知床岬先端部地区利用の自粛要請が出され、2009年度いっぱいこの自粛要請が継続されました。



▲ ヒグマに荒らされたトレッカーのテント。

自然環境保護管理対策

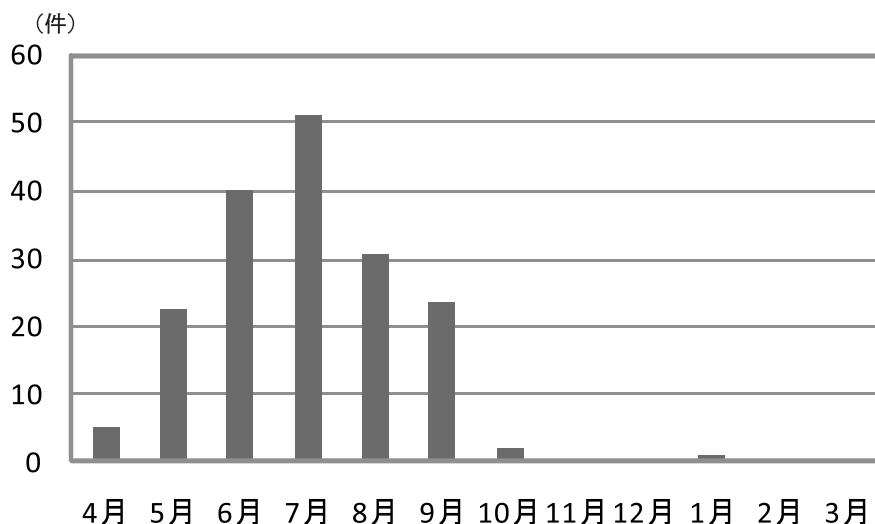
羅臼町の自然環境保全や野生鳥獣との共存のために、羅臼町一円における自然環境保全に関する現地調査、パトロール、啓発事業、傷病鳥獣の受入、野生生物の生息調査や保護管理業務を羅臼町と連携して実施しました。

羅臼町内におけるエゾシカと人間活動との軋轢を軽減するため、人家や車道近くでエゾシカを吹き矢及び麻醉銃を用いて捕獲し、住民生活への被害や交通事故を減少させました。



▲ 漁網にからまったキツネ。

■ 2009年度の羅臼地区のヒグマ出没への対応件数



国立公園野生生物管理業務

▼ 知床世界自然遺産地域内の核心地域である知床岬地区などの自然保護上重要な地域の自然保護監視・管理活動業務を、環境省自然保護官事務所配置のアクティブレンジャーと業務分担をしながら進めました。

知床における利用の適正化と野生生物との共生推進 (環境省委託業務)

①知床国立公園内のヒグマ対策

知床国立公園内および国指定知床鳥獣保護区内におけるヒグマの目撃件数は754件（斜里側 654件 羅臼側 100件）、対策活動実施件数は418件（斜里側 362件、羅臼側 56件）を記録しました。

②知床岬への立ち入り状況調査

知床岬への立ち入り者数は、8月9日から8月15日の計7日間で10組28人（内、動力船が4組18人、シーカヤックが4組4人、徒歩が2組6人）でした。

調査期間中の日平均立ち入り者数は4.0人と、1996年の調査開始以来最低の水準でした。その主な要因は天候不順とお盆時期の分散化などの社会情勢の変化によるものと思われます。

③傷病鳥獣の保護など

傷病鳥獣の保護は12件（斜里側6件、羅臼側6件）、野生動物死体の回収は22件（斜里側19件、羅臼側3件）でした。野生動物死体の内15件はエゾシカで、最も多い死因は交通事故でした。

アメリカオニアザミの駆除（環境省委託業務）

知床岬地区に繁茂する外来種のアメリカオニアザミについては、2004年～2008年の5ヵ年の駆除作業により、密生する場所が次第に縮小してきているという一定の成果が確認され、もう一息というところまで来ています。

一部の地域では密生地が一面に広がっていましたが、地面が岩と玉石のために、これまで駆除作業がうまく進みませんでした。2009年度はその地域で重点的な複数回の駆除作業を行ったところ、秋までに密生する範囲が縮小したことを確認しました。

セイウオオマルハナバチの生息状況監視・防除 (環境省委託業務)

2008年度に引き続き、特定外来種セイウオオマルハナバチの生息状況監視・防除を知床国立公園内を中心に行いました。知床岬地区で40頭を捕獲したほか、関係行政機関や地元の住民の協力を得て捕獲作業を行った結果、国立公園内（知床岬除く）で6頭、国立公園の周辺部であるウトロ地区と羅臼地区で366頭の合計412頭を捕獲しました。



▲ セイウオオマルハナバチ。腹部の末端の毛の色が白という特徴があります。



▲ アメリカオニアザミの除去作業。

知床生物多様性保全業務（知床海と森の生物多様性保全協議会受託委託業務）

- ▼ 知床世界自然遺産地域における生物多様性の保全を進める上で課題となっている野生鳥獣の生息状況を把握し、得られた成果によって、より具体的かつ効果的な世界自然遺産地域における野生生物の観察手法や観察ルール等を提案します。この事業は2008年度まで財団独自で行っていたものですが、2009年度については知床海と森の生物多様性保全協議会の支援を受けて実施しています。

ヒグマの生態調査・普及業務

①個体識別台帳の作成

ルシャ地区では、直接観察による個体識別と、それらを基にした個体識別台帳の作成を前年度から引き続き行いました。2009年度以降はこれらに加えて、糞や体毛からDNAを採取し、DNAを用いた性別判定と個体間の血縁関係推定の可能性を探りました。



▲ 体毛を採取するためのヘアートラップに近づくヒグマ。

②GPSテレメトリー調査によるヒグマの行動追跡

長年財団独自調査として取り組んできたGPSテレメトリー調査によるヒグマの行動追跡についても、知床海と森の生物多様性支援事業の支援を受けて実施しました。今シーズンは新たにメス成獣2頭と2歳のオス1頭の計3頭を捕獲しGPS機能がついた首輪を装着しました。メス2頭については現在も追跡中です。継続追跡中の既存標識個体は昨年4月の時点で2頭いましたが、1頭は5月に首輪が脱落し、もう1頭も電池消耗のためGPS機能は既に停止しており、追跡中の個体は2頭のみです。

③旭山動物園とのイベント共催

ヒグマに関する普及啓発業務として、旭川市旭山動物園と共催して「知床ヒグマわくわくウィークエンド」を開催、道内外から動物園を訪れた入園者に趣向を凝らしたイベントを通じてこれまでの成果を広く伝えました。



◀ 旭山動物園で行われた「知床ヒグマわくわくウィークエンド」のプログラムの一つであるヒグマ調査隊。親子でヒグマの捕獲・追跡作業を疑似体験してもらいました。

オジロワシ・オオワシ等希少鳥類のモニタリング調査

環境省レッドリストの絶滅危惧ⅠB類及びⅡ類に区分されているオジロワシとオオワシの保全対策立案を目的として、オジロワシの繁殖状況および冬季のオジロワシ、オオワシの飛来状況の長期的変動傾向の把握、オジロワシの繁殖状況に関するモニタリングおよび情報集約を実施しました。これらの事業は、環境省のワシ保護増殖事業と調整を図りながら実施しました。

トド・アザラシ等海棲哺乳類調査

海棲哺乳類の主要来遊海域である羅臼町沿岸域を主な調査区域として、観光船運航を行っている事業者等から目撃情報を収集しました。収集したデータを分析し、トドの種類ごとに、季節による出現傾向や、遭遇率を把握しました。それに加え、トドを主な対象とした長期モニタリングも継続して実施しました。得られた情報は、羅臼ビジターセンターやルサフィールドハウスでの展示や、広く一般の方々への普及活動、および関係機関等への情報提供に活用しました。



▲ 羅臼町沿岸に現れたトドの群れ。

しれとこ100平方メートル運動地森林再生推進業務（斜里町委託業務）

▼ 斜里町主催「しれとこ100平方メートル運動」の開始から32年、新運動「100平方メートル運動の森・トラスト」として原生の森の再生に向けた取り組みが始まり12年が経過しました。この知床の森を守り育てる取り組みの中で、知床財団は、森づくり作業や「しれとこの森交流事業」など運動に関わる現地業務を担っています。

森林再生作業

知床での森づくり作業は、5年毎の回帰作業方式を取り入れています。2009年度は、3巡目の回帰作業の2年目に当たり、幌別台地東側に位置する第2区画を中心に作業を行いました。

本格的な森づくり作業を開始して12年が経過し、初期の頃に設置した、エゾシカに苗木を食べられないように苗畑を囲む防鹿柵の木製の柱などは、腐食や劣化が進み交換の時期にきています。そのため、現在、3カ年計画で運動地各地の防鹿柵の改修作業を進めています。

その他にも、苗畑での広葉樹の苗木の育成や植樹、樹皮保護ネットのメンテナンス作業などを行いました。



▲ 防鹿柵の修理の様子。

しれとこの森交流事業

30年目を迎えた知床自然教室を記念して、9月の連休の3日間、「知床への回帰」と題したイベントを行いました。自然教室の卒業生や関係者総勢63名が知床に集い、これまでの自然教室を振り返るとともに、これからの100平方メートル運動についても熱く語り合いました。知床自然教室で培われた知床への思いは、着実に次の世代へと引き継がれていっています。

森づくりの現場と運動参加者の皆さんをつなぐ交流事業では、「第30回知床自然教室」（参加者43名）、「第13回森づくりワークキャンプ」（参加者12名）、「第13回しれとこ森の集い」（参加者100名）の企画・運営を行いました。

森林再生専門委員会議運営

森づくり作業の方針や計画は、動植物の専門家や地元の有識者で構成される森林再生専門委員会議の場で議論が行われその方向性などが定められています。

現地業務を担う知床財団では、2009年度の活動の成果と課題をまとめるとともに、2010年度の森づくり作業の具体的な方針や計画案を斜里町と検討を重ねながら立案しました。

11月に開催された専門委員会議では、上記の方針や計画案について話し合われるとともに、高密度に生息するエゾシカへの対応方針などが議論されました。

運動地広報企画

100平方メートル運動の広報誌『しれとこの森通信 No.12』の企画・編集作業を行いました。

また、知床財団のホームページにて、日々の森づくり作業や知床の森の様子をお届けするブログ「森づくり日誌」を新しく始めました。

<森づくり日誌>

<http://www.shiretoko.or.jp/saisei/>

その他にも斜里町の「しれとこ100平方メートル運動ホームページ」への掲載用写真の提供、マスコミ等の取材を積極的に受けるなど、運動の広報業務にも努めています。



▲ 知床自然教室30周年記念イベント「知床への回帰」に集まった自然教室卒業生と、その子供たち。

遺産地域調査業務

- ▼ 環境省が策定した「知床半島エゾシカ保護管理計画」の一環として、知床世界自然遺産地域内において、知床岬地区を主な対象地域としたエゾシカに関する調査のほか、植生・海域・海岸部のゴミ分布に関する各種調査を行いました。

知床岬におけるエゾシカ密度操作実験（環境省委託業務）

知床岬におけるエゾシカの密度操作実験が始まって、3年目の捕獲となりました。今シーズンはエゾシカが集結する時期でありながら、これまで天候と海況のために岬へたどり着けなかった厳冬期に捕獲を行いました。

流水接岸直前の1月に船での日帰り捕獲を1回と流水接岸後にヘリコプターでの泊まりがけ捕獲（4泊5日）を1回、海明け後の3月末に船の日帰り捕獲をさらに1回と、合計3回の実施でメス成獣86頭を含む158頭を捕獲しました。3冬の合計は412頭（うちメス

成獣249頭）となり、知床岬の自然植生に大きな影響を与えているエゾシカの群にかなりの打撃を与えられたと思います。



◀ 捕獲したエゾシカの回収にむかうスタッフ。スノーシューを使って雪の上を歩きます。

エゾシカ航空カウント・季節移動調査（環境省委託業務）

毎年2～3月頃に1回セスナ機で上空から知床岬の台地上にいるエゾシカの数进行調査を行っています。2009年度は1月と3月の2回調査を行いました。その結果、1月に行ったエゾシカの密度操作実験による捕獲前には374頭確認できましたが、3月の調査では35頭のみでした。

このような攪乱効果が長く続くことは期待できませんが、今冬の捕獲によってエゾシカの警戒心が高まり、岬台地草原への出没が減ったものと考えられます。またエゾシカの捕獲時期を4月以降ではなく1・2月とすることは、希少猛禽類（オジロワシ）の繁殖への影響を低減する効果も期待できます。

2009年3月にルサ・相泊地区で電波発信機を装着した22頭のメス成獣を1年間追跡しました。長距離移動していることが確かめられたのは、その内の3頭でした。



▲ セスナ機を使用してエゾシカの航空カウントを行いました。

エゾシカの植生への影響調査（環境省委託業務）

知床岬地区において、エゾシカが植生に与える影響を調査しました。知床岬に設置されている3つの植生保護柵内では、種数、個体数ともに在来種の回復が進んでいますが、2009年度より柵外でも植生回復の兆しがありました。土壌浸食も変化ありません。年変動の可能性がありはつきりと回復しているとは言えませんが、ササの高さの増加傾向もあり、密度操作実験によるエゾシカ捕獲の効果が出てきたのかも

知れません。



◀ 植生保護柵内での植生調査。

エゾシカの捕獲方法の検討（環境省委託業務）

銃器による従来のエゾシカの捕獲方法では、捕獲を繰り返すことによる捕獲効率の低下を避けられないことから、爆音器やブラインドを使用した上で、射撃の仕方も含めて、極力エゾシカに警戒心を与えない捕獲方法をルサ・相泊地区で実験しました。

爆音器によって銃声には馴れることがわかりましたが、捕獲効率が良くないという課題が残りました。



◀ エゾシカに警戒されないように、ブラインドを使用した捕獲方法を検討しました。

植生調査等（環境省委託業務）

7月末に遠音別岳近くのシレットコスミレ群落を調査しました。エゾシカの足跡や糞は見つかりましたが、コスミレに被食はありませんでした。

8月には3年目となる海岸植生調査を行い、斜里側の海岸線に25方形区（植物群落の標本抽出を行う際に用いる「わく」）を作りました。

これで斜里側に63ヶ所、羅臼側に29ヶ所で計92方形区が設置され、その地域本来の植生の分布や外来種の侵入、そしてエゾシカによる採食状況をモ

エゾシカの捕獲が希少猛禽類に与える影響調査（環境省委託業務）

知床でエゾシカの捕獲を実施するにあたって、シマフクロウやオジロワシなど希少猛禽類の生息、繁殖に与える影響を調査し、より希少猛禽に影響の少ないエゾシカの捕獲手法を検討するために、専門家による意見交換会を開催しました。



▲ 意見交換会の様子。

ニタリングする準備が整いました。今後は数年おきに調査を繰り返していきます。



◀ シレットコスミレの調査に向かうスタッフ。

海の生物調査関連（環境省委託業務）

知床の海に生息する生物についての各種調査として、サケ類の物質輸送、コンブ類の分布、動物プランクトン季節変化、深海域の栄養塩季節変化、主要魚種食性、浅海域生物相、サケ類の移動について実施されました。

また、2009年度は過去4年間に行われた全ての調査の取りまとめ年ということで、海洋環境の変動や水中ロボット（ROV）調査などを含めた取りまとめが行われ、知床の海の特徴について多くの新たな情報が得られました。



▲ 浅い海に生息する生物の調査。

遺産地域調査業務

沿岸部ゴミ分布状況調査・回収（環境省委託業務）

風致景観を著しく損なっている知床国立公園沿岸部の海岸ゴミの状況についての現地調査を行い、知床岬地区・ルシャ地区等において試行的に海岸ゴミの回収を行いました。

知床岬赤岩周辺地区では主に人力手作業のみにより7.86 t、ルシャ地区では重機を導入して30.87 tのゴミを回収しています。

また、今後の回収対策の検討・回収体制の構築を行うことを目的として、海岸清掃のあり方についての検討会を斜里町で2回行い、この事業に関する地元報告会を羅臼町と斜里町で各1回開催しました。



▲ 知床岬赤岩周辺で漂着したゴミを人力で回収するスタッフ。

科学委員会等運營業務

- ▼ 知床では世界自然遺産地域を適切に管理するために、科学的な見地からの行政への助言が科学委員会によって行われています。科学委員会は多分野の研究者や専門家16名の委員によって構成されています。当財団は、科学委員会とそれに付属するエゾシカワーキンググループの運営事務局として、本会議、地元説明会および数回の打合せ等の準備と会議運營業務等を行いました。

科学委員会（環境省委託業務）

科学委員会の会議は、第1回会議が7月23日に地元斜里町のゆめホール知床で、第2回会議が2月16日に札幌市のプレスト1・7で開催されました。第1回会議では、今後の遺産地域の管理計画（知床世界自然遺産地域管理計画）についての最終的な議論が行われ、その後12月に策定されました。第2回会議では、2004年度に設置された科学委員会の今後のあり方について議論され、今後の新たな課題に対してより適切に対応していけるよう2010年度からは体制を再編することになりました。

また、第1回会議の地元開催に合わせて、科学委員会の委員である梶光一東京農工大教授に斜里で、服部寛東海大学教授に羅臼で遺産地域での調査に係わる講演をしていただきました。

エゾシカワーキング会議（環境省委託業務）

エゾシカワーキング会議は、6月25日と10月30日に釧路と札幌でそれぞれ行われました。知床岬で行われているエゾシカの捕獲（P.27）について、捕獲開始から2シーズンを経た中間評価と3シーズン目の実施方法などが議論されました。



▲ 科学委員会の様子。

国立公園利用適正化業務

▼ 国立公園利用適正化業務では、知床国立公園の適正な利用を目指し、様々な業務を行っています。

マイカー規制（カムイワッカ自動車利用適正化対策連絡協議会委託業務）

自然環境の保全と国立公園の快適な利用を目的として、夏の70日間、カムイワッカ地域へのマイカーの乗り入れを規制してシャトルバスが運行されています。このマイカー規制において、円滑に運営するために、バス会社や各地に配置された警備員や巡視員との連絡調整、利用状況の調査や利用者への情報提供、ヒグマ出没時の連絡整理、負傷者への対応などを行いました。



▲ マイカー規制によりシャトルバスが運行されたカムイワッカ湯の滝。

エコツーリズム関連（環境省委託業務）

地域の発展と、観光利用、自然保護を両立させるエコツーリズムを推進することを目的としたエコツーリズム総合推進事業を環境省から受託しました。2004年度～2007年度のエコツーリズム推進モデル事業をさらに発展させるための業務で、2009年度が3年間の取り組みの最終年でした。

これまで取り組んできた地域産業連携プログラムを専門家に評価・提言を受けるなど、これまでの推進事業の区切りとして、エコツーリズム推進計画を見直し、

質の高いガイドツアーに代表される知床のエコツアーを推進していく方針を確認しました。



◀ 冬季利用された知床五湖周辺地域。

知床五湖関連（環境省委託業務）

知床最大の観光スポットでもある知床五湖では、ヒグマのリスクを回避しつつより良い自然体験を提供する新しい利用のあり方の検討が進んでいます。国立公園利用適正化業務内の複数の業務に含まれる形で、様々な検討や試行の実施を担いました。

新しい制度の柱となる、自然公園法の利用調整地区制度導入のために、現状の利用が環境に与える影響の分析、制度導入時の運用体制の検討、ヒグマに対する対処法を習得した登録引率者がガイドを行う知床五湖の利用コントロール導入実験の実施と、認定のための研修制度の設計と実施、さらには実験の結果を受けてヒグマが活発に活動する時期の運営

体制の詳細を検討する部会運営などを行いました。



▲ 知床五湖利用コントロール導入実験受付の様子

国立公園利用適正化

国立公園利用状況関連（北電総合設計委託業務）

知床国立公園利用状況を把握するために、知床五湖を中心として、知床連山、羅臼湖、カムイワッカ地区などの知床半島中央部地区および、知床半島先端部地区において「利用適正化基本計画」の具体化を進め、関係者の合意形成を図りつつ、ルール作成、ルールの周知、利用実態・利用影響のモニタリング等を行いました。

その他

林野庁からの受託事業として、国有林を森林環境教育フィールドとして活用する「遊々の森」制度の紹介のために、フィールドマップおよび体験プログラムを作成する業務を行いました。



▲ フィールドマップ作成のための現地調査。

JBN業務

- ▼ 日本クマネットワーク（JBN）からの受託業務として、会員向けニュースレター「Bears Japan」の発行・発送、「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」の発行・販売、ホームページの運営管理を行いました。

会員向けニュースレターは計3回、のべ879部を発行・発送しました。また、「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」については、店頭および通信販売を通じて計89部を販売しました。ホームページについては、日常的な掲載内容の更新や全面的なサーバーの移転まで、幅広い運営業務をJBN事務局と連携して実施しました。



JBN会員向け
ニュースレター

■日本クマネットワークについて

日本クマネットワークは、個人や地域ごとの単独の活動だけでは難しい全国レベルの諸問題や国際問題に関し、必要に応じて社会に対して働きかけを行い、人とクマのより良い関係を構築する活動を行っているNGO組織です。近年はアジア地域のクマ類の保全に焦点をあてて精力的に活動を行っています。会員は専門家やクマに関心を持つ一般市民、およそ280名で構成されています。

Web <http://www.japanbear.org/cms/>

8

理事会・評議員会・協議会の開催・運営

理事会・評議員会・協議会の開催・運営

定例の理事会・評議員会を、5月、12月、3月の年3回開催しました。5月に行われた理事会では公益法人移行検討専門委員会の設置、公益財団法人移行後の最初の評議員の選任方法が承認され、公益法人移行に向けて具体的な作業が進むことになりました。

また、臨時的に4月に理事会、9月に理事会・評議員会を開催しました。4月の理事会では新しい理事長が選任されました。また、9月の理事会では最初の評議員選定委員会委員の選任が行われました。

その他、当財団の役員の方々に向け、事務局の最新の動向をお知らせする「財団ニュースレター」を、10月、3月の年2回発行しました。

■ 2009年度役員名簿

理 事	関根 郁雄（理事長）	監 事	中川 元
	辻中 義一（副理事長）		宮腰 實
	佐々木 富美男	評議員	高橋 一三
	金盛 典夫		吉野 弘志
	佐々木 泰幹		木野本 伸之
	石田 順一		遠山 和雄
	村田 良介		金澤 裕司

財団組織改革推進事業

- ▼ 当財団が幅広く事業を展開し、保全活動を長期に継続していくために、必要に応じて組織の見直し・改革を進めています。2009年度は公益財団法人化を目指した具体的な作業が行われました。

公益財団法人移行を目指した具体的な例

2009年5月に発足した公益財団法人移行検討専門委員会において、4回にわたる委員会を開催し、移行後に適用される新たな定款の案の作成作業を行いました。

また、それと並行し、公益法人移行認定審査の際の重要なチェックポイントとなる申請書類の作成を行いました。特に、財団が行っている事業が公益性を有することを説明する書類や、財務状況を説明する書類を移行後の財政運用を想定しながら作成しました。

公益財団法人化のメリット

- **社会的信頼の維持**
社会的により高い信頼を得られる可能性が高い。
- **税制上の優遇措置**
法人税は公益目的事業以外の収益事業に課税。
利子・所得税は非課税。
- **寄付者の優遇措置**
公益財団法人への寄付は所得控除が認められる。

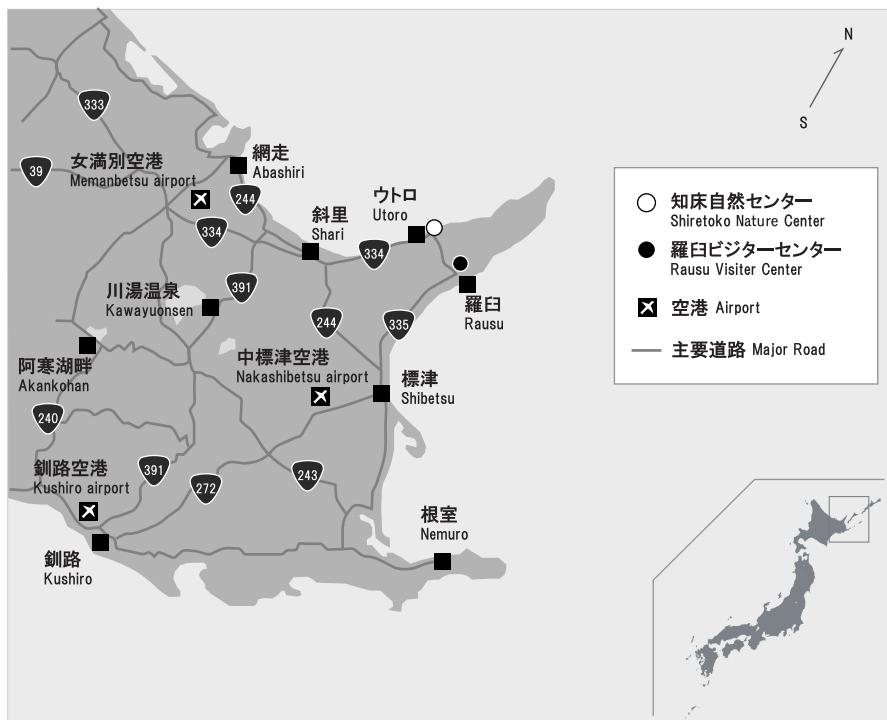
公益財団法人化のデメリット

- **認定基準等による制約**
18項目の認定基準を満たす必要がある。
- **認定手続きの煩雑さ**
事務処理等の手間が増加する。
- **取り消しリスク**
認定後、認定基準を満たさなければ取り消されることがある。

2009年度の組織概要

名 称	財団法人 知床財団 （2003年6月に名称変更 旧名称 財団法人 自然トピアしれとこ管理財団）
設 立	昭和63年（1988年）9月23日
設立者	斜里町・羅臼町
基本財産	4,500万円
所在地	〒099-4356 北海道斜里郡斜里町字岩宇別531番地 知床自然センター
目 的 (寄附行為 第3条)	この法人は、知床国立公園の自然環境に関する調査・研究、自然保護思想の普及啓もう等の事業を行い、もって広く国民の自然保護思想の高揚と自然利用の適正化に寄与することを目的とする。
事 業 (寄附行為 第4条)	(1) 知床の野生動植物の調査・研究 (2) 自然保護思想の普及啓もう (3) 自然保護に関する諸団体との提携 (4) 自然環境の保全管理および、公園施設等の管理運営受託業務 (5) その他目的を達成するために必要な事業
職 員	27名

2009年3月末



知床自然センター

〒099-4356 北海道斜里郡斜里町字岩宇別531番地
TEL 0152-24-2114 FAX 0152-24-2115
E-mail info@shiretoko.or.jp

<http://www.shiretoko.or.jp/>



知床世界自然遺産・知床国立公園 羅臼ビジターセンター

〒086-1822 北海道目梨郡羅臼町湯ノ沢町6-27
TEL 0153-87-2828 FAX 0153-87-2876
E-mail rausu_vc@shiretoko.or.jp

<http://rausu-vc.jp/>

「Discover Shiretoko」キャンペーン

インターネットブラウザを提供するモジラジャパン社との共同で2009年6月～9月に開催。知床財団や100平方メートル運動を大々的に取り上げた特設ウェブサイトを開設していただきました。

Web <http://www.discovershiretoko.org/ja/>

知床の価値ある自然を 私たちと一緒に守りませんか

[http://www.shiretoko.or.jp/
supporter/supporter.htm](http://www.shiretoko.or.jp/supporter/supporter.htm)

「どなたでも知床の自然保護活動に貢献できます！」

知床の自然を未来へ遺していくためには、皆様の継続的な支援が不可欠です。
皆様が知床の自然を思う気持ちを私たちに託して下さい。

知床財団の賛助会員制度

会員になると、知床自然情報誌SEEDSや刊行物を定期的にお届けする他、知床自然センターの映像展示館の入館料免除、知床フィールド講座の参加費割引など各種特典があります。

個人年会員	5,000円/年	法人年会員	20,000円/年
個人終身会員	100,000円/終身	法人特別年会員	100,000円/年
寄 付	おいくらからでも受け付けています。(5千円以上のご寄附をいただいた方に本誌を1部お送りします。)		

●振込先 郵便振替 02750-2-37694 ●加入者名 財団法人 知床財団

知床財団の法人特別年会員

Web

(2007.4月～)
MOL 商船三井フェリー

(2008.2月～)
Live シーライヴ株式会社

〈寄付のお礼掲載〉 Web http://www.shiretoko.or.jp/supporter/support_thanks.htm

寄付のお礼

寄付

社団法人日本損害保険代理業協会

2005年度から5年間、同協会が行っている「グリーン基金」から、財団へ年額10万円の寄付金が寄せられることとなっており、2009年度も寄付をしていただきました。

寄付

札幌テレビ放送株式会社

札幌テレビ創立50周年記念環境キャンペーン事業のひとつとして開催された「セザンヌ主義」展において、キャンペーン商品の売り上げの一部を寄付していただきました。

受賞について

受賞

2009年10月9日、第1回生物多様性日本アワードの保全フィールド部門の優秀賞を受賞しました。この賞は2010年10月に名古屋市で開催された生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)に向けて生物多様性の保全を目的に、環境省および財団法人イオン環境財団が創設したものです。アワードについて Web http://www.shiretoko.or.jp/report/2009/10/1_2.html



REPORT²⁰⁰⁹

Annual Report of Shiretoko Nature Foundation

知り、守り、伝える。

